ハムステッド・ガーデン・サバークのバタフライ型住棟について

イギリスの田園郊外とその住宅に関する研究 (I)

BUTTERFLY HOUSES IN HAMPSTEAD GARDEN SUBURB

Research on the English garden suburb and its houses (I)

片木 篤*

Atsushi KATAGI

Here is analyzed the syntactic relations between urban and housing designs in the English garden suburbs, which is epitomized in Hampstead Garden Suburb, Middlesex, planned by Raymond Unwin from 1906. The model designs of road junction illustrated in Unwin's book, *Town Planning in Practice*, 1909, are compared to the executed designs in Hampstead Garden Suburb, where most of the important road junctions are formed as hexagonal plazas surrounded by so-called butterfly houses. Unwin wisely combined Sitte's idea of the plaza with the Edwardian experiments of butterfly house, while other architects, such as M.H. Baillie Scott, G.L. Sutcliffe and C.M. Crickmer, transformed Unwin's concept into various designs to create a series of characteristic nodes in Hampstead Garden Suburb.

Keywords: garden suburb, Hampstead Garden Suburb, Raymond Unwin, butterfly houses
田園郊外, ハムステッド・ガーデン・サバーク, レイモンド・アンウィン,
バタフライ型住棟

1. 序

本研究¹⁾は、イギリスの田園郊外 (garden suburb)²⁾の都市計画と住宅建築との意匠上の相関を考察するものである。研究対象として、ハムステッド・ガーデン・サバーク (Hampstead Garden Suburb, Middlesex, 1906-) を取り上げるが、それは、ハムステッド・ガーデン・サバークが「20世紀の田園郊外の中で、芸術的に最も満足ゆくものであり、かつ社会的に最も成功したもの」³⁾と評され、田園郊外の代表例と見做されているからである。

本研究では、まずハムステッド・ガーデン・サバークの全体計画を行ったレイモンド・アンウィン (Raymond Unwin, 1863-1940) が、郊外住宅地計画において、都市計画家によって計画される道路と建築家によって設計される住棟との意匠上の調和を重要視し、主著『都市計画の実践』 (*Town Planning in Practice*, London, 1909) の中で、1)道路交差点-バタフライ型住棟 2)クルドサ

ック道路-クアドラング型住棟 3)曲線道路-クレセント型住棟 という3タイプの道路-住棟モデルを提案していることに着目する。次にハムステッド・ガーデン・サバークにおけるそれらの実例を、ハムステッド・ガーデン・サバーク・トラスト株式会社に審査用として提出された図面 (現在、ハムステッド・ガーデン・サバーク資料室に収蔵・保管されている) から読み取り、『都市計画の実践』で提案されているアンウィンのモデルが、アンウィン自身や他の建築家によってハムステッド・ガーデン・サバークでどのように変更されて実施されたかを比較する。そしてその比較を通じて、ハムステッド・ガーデン・サバークにおける道路-住棟の意匠上の相関の特徴を明らかにするとともに、アンウィンのモデルの有効性を検証するものとする。

ここでは本研究 (I) として、道路交差点とバタフライ型住棟の組み合わせについての分析を行うこととする。

* 名古屋大学工学部建築学科 講師・工博

Lecturer, Department of Architecture, Faculty of Engineering, Nagoya Univ., Dr. Eng.

道路	A 直交			B 斜交			
	A-1 T字路	A-2 十字路		B-1 Y字路		B-2 変形十字路	
I 広場
II 住棟配置	II-1 直交配置
	II-2 斜交配置
III 事例			• Meadway/Beathgate	• Hampstead Way/ Villifield Way	• Hampstead Way/ Asmuns Hill	• Hampstead Way/ Temple Fortune Hill • Addison Way/ Hogarth Hill	• Villifield Way/ Temple Fortune Hill • Hampstead Way/ Meadway

図-1 レイモンド・アンウィンの道路交差点モデル

II. アンウィンの道路交差点モデル

アンウィンは、『都市計画の実践』の中で、郊外住宅地計画における都市計画家と建築家との関係を次のように想定している。都市計画家は「まず道路のおおよその位置を定め、次に建物の正しい配置に注意を向ける。

（中略）建物を大まかに配置し、自分が得ようと欲している景観を決定した後、主要な定点から順に敷地割りを考えていく。建物に敷地境界線を合わせる方が、所定の敷地境界線に建物を合わせるよりも、通常ずっと容易なのである。」⁴⁾ 反対に「建築家は、所与のストリート・ピクチャ内で自分の建物がどのように収まるかを最初に考えるよう訓練されねばならない。」⁵⁾ そして最終的には「指導と監修によって、ある程度のデザイン基準を設け、ある程度の調和を確保して、少なくとも今日郊外地域を傷つけているおぞましく醜悪な犯行を避けることができる」⁶⁾と言う。

その一方でアンウィンは、「芸術的観点に立てば、建物のある程度のグループ化は、良きストリート・ピクチャを作り出すためにはほとんど必須であることは疑い得ない」⁷⁾と言ひ、郊外住宅地計画における住戸集合の必要性を説く。つまり彼は、郊外住宅地計画においては都市計画家と建築家とが協力して、道路といくつかの住戸が集合した住棟との意匠上の調和を図ることによって、良きストリート・ピクチャを得ることができると考えているのである。

アンウィンは、特に道路交差点とそれを囲む住棟とが作り出すストリート・ピクチャを重要視する。「都市

の効果の大半は、道路交差点の処理に依存している。まず流れやすい交通動線と交差点回りの適度に開放された眺望とを確保すれば、次に満足いく建物のグルーピングに我々の注意を払うことができる。」⁸⁾ 流れやすい交通動線と交差点回りの適度に開放された眺望は、「隅部の建物をセットバックさせ、交差点に小さな『広場』を形成することによって確保される。」⁹⁾ また満足いく建物のグルーピングは、その交差点広場に「包囲感や建物による完全な縁取りの効果」¹⁰⁾をもたせることで達成されるが、そのためには、第一に広場が入隅をもつこと、第二に広場に進入する道路のヴィスタが閉ざされていることが求められる。アンウィンは「全ての道路交差点において、道路の進入角度と建物の正面との関係は、それがすばらしい芸術的創造となるか、あるいは単なる街区隅部の不様な寄せ集めに過ぎなくなるかを、ほとんど決定してしまう」¹¹⁾と述べる所以である。

アンウィンは「図」として限定された交差点広場を考えており、実際『都市計画の実践』の中では、道路と交差点広場を「図」として、建物を「地」として描き（図1-I）、入隅をもった交差点広場が道路のヴィスタを閉ざしていることを明示している。そうした考えは、明らかにカミロ・ジッテ著『芸術的原理に基づいた都市計画』（*Der Stadtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen*, Wien, 1889）の影響を受けたものである¹²⁾。しかし、ジッテ以後のドイツの都市計画家が中世都市の不規則な道路と広場に固執したのに対し、アンウィンは交差点広場において入隅と進入道路のヴィスタの

図-2 ハムステッド・ガーデン・サバールのマスタープラン、1905年

図-3 ハムステッド・ガーデン・サバールのマスタープラン、1909年

図-4 ハムステッド・ガーデン・サバールのマスタープラン、1912年

閉鎖とが必要であることに着目して、道路と交差点広場を規則化した。更に、その規則的な道路と交差点広場に対する建物の規則的な配置モデルを検討したのである(図1-II)。

そこでアンウィンは、3本の道路が直交するT字路(図1-A1)を基本として位置付け、4本の道路が直交する十字路(図1-A2)には「ヴィスタが無限に伸びる」¹³⁾欠点があることを指摘する。代わりに3本の道路が120度の角度をもって交差するY字路(図1-B1)を推奨して、「道路は常に直角に交わる訳ではなく、時として3本の道路が1点で交わることが求められる場合がある。その際には、建物によってストリート・ピクチャーの終結部を確保した、有用でシンメトリカルな交差点が計画される。わけでも、鈍角は全ての方向に流れやすい動線を提供してくれるのである。」¹⁴⁾と言う。更には、カールスルーエのローデン広場を参照して¹⁵⁾、直線道路の1点に2本の道路が120度の角度をもって斜交する変形十字路(図1-B2)も考案しているのである。

Ⅲ. ハムステッド・ガーデン・サバールの全体計画

1903年3月、慈善事業家ヘンリエッタ・オクタビア・ウェストン・バーネット夫人は、チャーリングクロス・ユーストン&ハムステッド鉄道の延長によって、ハムステッド・ヒースの自然が破壊されることを懸念し、ヒースを拡張した地所を買い取って保存するためのヒース拡張委員会を設立した。同年11月、それに住宅地開発を組み込んだ提案を行い¹⁶⁾、1905年2月には「あらゆる社

会階級、あらゆる収入水準の人々を収容するコミュニティ」¹⁷⁾建設を訴えた。バーネット夫人の提案を実現するに際して、第一田園都市レッチワース(Letchworth, Hertfordshire, 1903-)が参照され¹⁸⁾、1906年3月には土地を買収するためのハムステッド・ガーデン・サバール・トラスト株式会社が、1907年には住宅建設を受け持つ共同借家人株式会社が設立された。レッチワースの全体計画を行ったレイモンド・アンウィンは、1905年1月からヒース拡張委員会の依頼を受け¹⁹⁾、ヒース拡張部の境界を定めるとともに、1906年5月には正式にハムステッド・ガーデン・サバール・トラスト株式会社の建築家に任命され、敷地の調査、マスタープランの作成、建築家や建設業者の提出する図面の審査にあたることになった。同時にエドウィン・ラッチェンス(Edwin Lutyens, 1869-1944)が同社顧問建築家に任命され²⁰⁾、中央広場とそれを囲む住棟の設計の任に就いたのである。

アンウィンは『都市計画の実践』を執筆した時期が、丁度彼がハムステッド・ガーデン・サバールのマスタープランをまとめる時期と重なっており、アンウィンの道路と交差点に対する考えが、ハムステッド・ガーデン・サバールのマスタープランに反映されている。

1905年2月22日付けのマスタープラン(図2)²¹⁾では、敷地の最も高い所に教会・図書館・美術館等が立ち並ぶ中央広場を²²⁾、北側の丘の上に三角形の緑地と公衆浴場・洗濯場を²³⁾、幹線道路と接する最も低い所に公園と店舗を配して、これら3つのセンターを等高線に沿った曲線道路で結んでいる。また現在のウィリフィー

ルド・ウェイとテンプルとフォーチュン・ヒルとの交差点には八角形の小広場が設けられている。

1909年の『都市計画の実践』に添付されたマスタープラン(図3)では、3つのセンターの位置は変えられていないが、当初の曲線道路が直線化され、不規則形の中央広場や公園が規則化されている。更にハムステッド・ウェイとアスマンズ・ヒルとの交差点、ハムステッド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルとの交差点がY字路となり、ウィリフィールド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルとの交差点、ハムステッド・ウェイとミードウェイとの交差点が変形十字路に整備されている。

1911年にハムステッド・ガーデン・サバープ・トラスト株式会社と共同借家人株式会社が今までの地所西側に新しい地所を借地したのを踏まえて、アンウィンが作成したマスタープラン(図4)では、まず地所北側を東西に横断するアディソン・ウェイが通され、それとホガース・ヒルとの交差点がY字路となり、更に中央広場から西に放射状に伸びる3本の道路²⁴⁾がアディソン・ウェイ等他の道路と交わる所には、住棟によって取り囲まれた多角形の小広場が形成されている。このマスタープランはハムステッド・ガーデン・サバープ・トラスト株式会社と共同借家人株式会社との主導権争いにより実現されずに終り²⁵⁾、「新郊外」ではアンウィンの交差点広場は実現されずに終わるのである。

IV. ハムステッド・ガーデン・サバープにおける道路交差点とバタフライ型住棟の分析

アンウィンは、ハムステッド・ガーデン・サバープにおいて、交差点広場の入隅部、即ち街区の出隅部に当たる所に住戸を連ねることが可能となるよう建築法規の緩和を訴え、成功した。当時の法規では、住宅背面のオープン・スペースについて、建物幅と同じ幅をもつ長方形の場合には奥行が30フィート以上、三角形の場合には住宅背面から頂点までの水平距離が60フィート以上と定められていた。それに対し1906年に制定されたハムステッド・ガーデン・サバープ法では、隅部の住宅について、正面以外の一面が450平方フィート以上のオープン・スペースに隣接している場合には、住宅背面のオープン・スペースは幅10フィート以上、面積150平方フィート以上あればよいことになった。つまり、住宅背面のオープン・スペースの狭さを側面のオープン・スペースで補ってもよいという緩和がなされたのである。その緩和の下で、アンウィンはY字路や変形十字路の回りにバタフライ型住棟を配し、その壁面や屋根の連続によって六角形の交差点広場を囲い込むモデルを考案し、それをハムステッド・ガーデン・サバープで実践したのである。『都市計画の実践』に掲載された道路交差点モデルに、ハムステッド・ガーデン・サバープにおける実例を照合させ

ると、図1-Ⅲのようになる。

ジル・フランクリン等が指摘するように²⁶⁾、エドワード朝の独立住宅では、リチャード・ノーマン・ショウ(Richard Norman Shaw, 1831-1912)やエドワード・プライア(Edward Prior, 1852-1932)を筆頭にして、ラッチェンス、ベイリー・スコット(M. H. Baillie Scott, 1865-1924)、エドガー・ウッド(Edgar Wood, 1860-1935)²⁷⁾あるいはアンウィン自身が²⁸⁾、ウィングを蝶の羽のように斜めに張り出したバタフライ型平面を試みた。それは、平面・立面がシメトリカルであるにも関わらず、「ロマンティックな複雑さ」²⁹⁾をもつ外観を呈するばかりか、それぞれの部屋からも様々な眺望を得ることができ、とりわけ斜めに張り出したウィングがテラスを囲い込み、そこで一日の様々な時刻の日照を楽しむことができる。バタフライ型平面が、別名「サントラップ・プラン(suntrap plan)」³⁰⁾と呼ばれる所以である。アンウィンの独創は、独立住宅において試みられたバタフライ型平面を住棟に応用し、ジッテの広場の造形と結び付けた点にある。即ち、バタフライ型住棟の壁面や屋根の連続によって六角形の交差点広場を囲い込み、更にその住棟の玄関ポーチ、ベイウィンドウ、ゲブルといった特徴的な建築要素を、道路に沿ったヴィスタの終結部を示すものとして用いたのである。

以下、ハムステッド・ガーデン・サバープにおいて道路交差点を完全にバタフライ型住棟が取り囲む例として、1)ハムステッド・ウェイとミード・ウェイの交差点 2)ウィリフィールド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルの交差点 3)アディソン・ウェイとホガース・ヒルの交差点を取り上げ、その詳細を検討することにする。

IV-1) ハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点を囲む住棟

アンウィンは、『都市計画の実践』の中で、ハムステッドウェイとミードウェイの交差点について、アンウィン自身とベイリー・スコットの住棟配置案を2案並置し(図5)、「都市計画家の道路交差点に対する基本構想が、その回りの建物の設計を委託された建築家によって修正されているものの、構想の眼目は維持されている極めて興味深い例である」³¹⁾と解説している。アンウィン案では、ハムステッド・ウェイの軸線に正対するように独立住宅が配され、それと両側の住棟が壁でつながれている。一方ミードウェイの軸線に対して、交差点に向かってくの字型に屈曲した平面をもつ独立住宅が2棟シメトリカルに配されている。かたやベイリー・スコット案では、ハムステッドウェイの軸線の南東端に4戸連続住棟(住棟Ⅰ)、北西端に3戸連続住棟(住棟Ⅱ)が配される一方、ミードウェイの軸線に対して、交差点とは反対側にくの字に屈曲した平面をもつ独立住宅(住棟

図-5 ハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点を囲む住棟、左図：アンウィン設計 右図：ベイリー・スコット設計

図-7 同住棟Ⅰ、透視図

図-8 同住棟Ⅱ、透視図

図-6 同1階平面図、ベイリー・スコット設計

図-9 同住棟Ⅲ・Ⅳ、透視図

Ⅲ・Ⅳが2棟シンメトリカルに配されているのである(図6)。

まずベイリー・スコットが1908年に設計した住棟Ⅰを見てみよう。正面(図7)は、ハムステッド・ウェイの軸線に対してシンメトリカルに構成されており、中央にハーフティンバーの玄関ポーチ、両側にラフキャストのゲブルが付けられ、そこから羽目板貼りの1階建ウィングが突き出されて、ハムステッド・ウェイと同じ幅をもつ前庭を囲っている。立面上は、この中央部が住戸Ⅰ-2に相当するよう見えるが、平面上では、向かって右手のウィングが住戸Ⅰ-1のサービス部となっており、住戸Ⅰ-2はアシンメトリカルなL字型平面となっている。この住戸Ⅰ-2では、北側に玄関ポーチと廊下がとられるのに対し³²⁾、南側ではドローイング・ルーム、ホール、ダイニング・ルームが一行に並べられたオープン・プランとなっており³³⁾、平面の屈曲はドローイング・ルームとダイニング・ルームに多角形を導入することで調整されている。住戸Ⅰ-1、Ⅰ-3も同じく北廊下型平面を持ち、ホールとダイニング・ルームとはオープンにつなが

られている。

住棟Ⅱの正面(図8)では、ラフキャスト仕上げの2階建ウィングが斜めに突き出されてテラスを囲っているが、この中央部がそのまま住戸Ⅱ-2に対応しており、住戸Ⅰ-2で見られたような立面と平面の食い違いは見られない。各住戸では、南側に主要居室が配され、北側にサービス部が集められているので、人は道路から一旦中庭に入り、そこから住戸側面に設けられた玄関に至ることになる。住棟Ⅲ・Ⅳは独立住宅で、中央に六角形のホール、両側の斜めに突き出されたウィングにドローイング・ルームとダイニング・ルームとが収められた平面をもつ。この六角形ホールを中核としたオープンなバタフライ型平面は、ベイリー・スコットの以前の住宅計画案「芸術愛好家の住宅」競技設計1等案(Dulce Domum, 'house for an artlover', 1901)やイエローサンズ(Yellowsands, 1903)の延長に位置付けることができよう³⁴⁾。そして、その中核がハーフティンバー造のゲブルとして外観に表現されているのである(図9)。

ベイリー・スコット案は、住棟Ⅰが1909年に実現され

図-10 ハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点を囲む住棟、屋根伏図、ベイリー・スコット（住棟Ⅰ）及びサットクリフ（住棟Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）設計

図-12 同住棟Ⅰ、正面

図-13 同住棟Ⅱ、正面

ただで、残る3棟は、1912年にサットクリフ（G. L. Sutcliffe, 1864-1915）が設計し直して建設した。サットクリフの住棟Ⅱ（図10・図11）では、両側の住戸Ⅱ-1、Ⅱ-3から半八角形平面をもつウィングが斜めに突き出され、前者が住棟Ⅳのダイニング・ルームのウィングに、後者が住戸Ⅰ-2の台所のウィングに呼応して、交差点広場を大きく六角形に取り囲んでいる。その結果、中央の住戸Ⅱ-2は単純な十字型平面となり、その真ん中から突き出されたシッティング・ルームのベイウィンドウが、ハムステッド・ウェイの軸線を受け止めているのである（図13）。それは、ベイリー・スコットの住棟Ⅱにおいてウィングの間隔が狭く、それらが交差点広場を大きく囲うまでには至らなかったのとは対照的である。。また各住戸では、中央に玄関、階段、シッティング・ルームが配され、両側にドローイング・ルームとダイニング・ルームが振り分けられた平面をもっており、ベイリー・スコットが考えていた南面主要居室のオープンなつながりは見られない。住棟Ⅲでは、長方形平面の住宅本体が

図-11 同1階平面図

図-14 同住棟Ⅳ、現況

南西側庭園に面しており、それに対して、サービス・ウィングが東側道路に沿って斜め方向に取り付けられている。他方住棟Ⅳでは、中央に玄関、階段、ホールがとられ、両ウィングにドローイング・ルームとダイニング・ルームが収められている。住棟Ⅲの正面と住棟Ⅳの正面（図14）とは、交差点を中心にして鏡像対称をなすが、両者の平面は全く異なっている。それは、主要居室に対する日照を配慮した結果であると考えられよう。

Ⅳ-2) ウィリフィールド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルの交差点を囲む住棟配置

ウィリフィールド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルの交差点は、設計者クリックマー（C. M. Crickmer 1879-1971）の名を取ってクリックマー・サーカスと通称されている。クリックマーは1905年と1907年にレッチワースで行われたチープ・コテージ展で入賞を果たし、レッチワースに数多くの住宅を建てた建築家であるが、このクリックマー・サーカスも、彼の代表作の一つに数え

図-15 ウィリフィールド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルの交差点を囲む住棟、屋根伏図、クリックマー設計

図-17 同住棟 I、正面

図-18 同住棟 II、正面

られている。

ここでは、ウィリフィールド・ウェイの軸線の南東端に4戸連続住棟（住棟 I）、北西端に6戸連続住棟（住棟 II）が配される一方、テンプル・フォーチュン・ヒルの軸線に対して、交差点に向かってくの字に屈曲した平面をもつ3戸連続住棟（住棟 III・IV）が2棟シンメトリカルに配されて、全体として六角形の交差点広場が包囲されている（図15・図16）。

1909年から10年にかけて設計された住棟 I の正面（図17）は、ウィリフィールド・ウェイの軸線に対してシンメトリカルに構成され、中央に住戸 I-3 の玄関ポーチが、その両側に住戸 I-2、I-4 のパーラーが突き出され、ウィリフィールド・ウェイと同じ幅の前庭を囲んでいる。背面もシンメトリカルに構成されるが、その中心は住戸 I-3 のリビング・ルームのベイウィンドウで示されており、正面と背面の中心がずれている。ここでの住戸は、1階にリビング・ルーム、パーラー、台所を、2階に3ないし4の寝室と浴室をもっている。住戸 I-1 が、六角

図-16 同1階平面図

図-19 同住棟 IV、現況

形の交差点広場の入隅を作るべく折り曲げられた平面をもつのに対し、それ以外の住戸は全て長方形平面をもち、玄関を中心にしてリビング・ルームとパーラーの並びとサービス部とが振り分けられている。

同時期に設計された住棟 II の正面（図18）では、中央に住戸 II-4 のベイウィンドウが、その両側に住戸 II-2 と II-3、住戸 II-5 と II-6 のリビング・ルームが突き出され、ウィリフィールド・ウェイと同じ幅の前庭を囲んでいる。ヴォイジーやラッチェンスの独立住宅に見られた二連ゲープル³⁵⁾ が、ここでは住戸の分節を明示するものとして用いられている。1908年に設計された住棟 IV の正面（図19）は、中央に住戸 IV-2 の玄関が、その両側に住戸 IV-1 と IV-3 のリビング・ルームのベイウィンドウが配されたものであり、同型の住棟 III の正面と共に六角形の交差点広場の入隅を作っている。

IV-3) アディソン・ウェイとホガース・ヒルの交差点を囲む住棟

図-20 アディソン・ウェイとホガース・ヒルの交差点を囲む住棟、屋根伏図、パーカー&アンウィン設計

図-21 同1階平面図

図-22 同住棟 I、正面

図-23 同住棟 II、正面

図-24 同住棟 III、現況

ウィリフィールド・ウェイとテンプル・フォーチュン・ヒルの交差点を囲む住棟が、白いラフキャストの壁とゲーブルをもつコテージであったのに対し、1910年パーカー&アンウィンによって設計されたアディソン・ウェイとホガース・ヒルの交差点を囲む住棟は、赤い煉瓦の壁と寄棟屋根をもつネオ・ジョージアン様式によるものである。様式の違いこそあれ、交差点をバタフライ型住棟によって六角形状に取り囲むのは、前者と同様である（図20・図21）。

住棟 I では、両端の住戸 I-1 と I-6 が屈曲平面となって六角形の交差点広場の入隅を作っており、その一部が寄棟屋根をいただく塔³⁶⁾としてそびえ立ち、住棟全体の両端を固めている（図22）。中央の4戸では、1階の一方に玄関、階段、サービス部が、他方にパーラーとリビング・ルームが配され、2階に浴室と3寝室が取られた平面をもつ。住棟 II も同じく両端に塔が立つ正面を有するが（図23）、この棟はいわゆるフラッツとなっており、1階にはリビング・ルームと2寝室をもつ住戸が6

戸、2階にはリビング・ルームと3寝室をもつ住戸が6戸上下に積み重ねられている。住棟 III でも住棟 I と同様にして、両側の住戸 III-1 と III-4 が屈曲平面もち、その一部が塔として立ち上がっている（図24）。中央の2戸では、1階にリビング・ルーム、玄関、階段、サービス部が、2階に浴室と3寝室が配された平面をもつ。ここでは、同型の塔が計6本立っており、向かい合う1対の塔が道路に対するゲートを形成しているのである。

V. 結

ハムステッド・ガーデン・サバークにおける道路交差点を囲む住棟配置と住戸平面をまとめてみよう。例1)及び2)の変形十字路では、斜めに進入する道路に対して住棟が正対して置かれ、道路の中心軸上に玄関ポーチ、ベイウィンドウ、ゲーブルが突き出されて道路のヴィスタが閉ざされ、更に道路の幅に沿ってウィングが突き出されて道路のヴィスタが枠付けられていた。他方直進道路に対しては、くの字型平面をもつ1対の住棟がシンメト

リカルに置かれ、広場の入隅が作られると共に、道路に対するゲートが形成されていた。例3)の不規則なY字路では、斜めに進入する道路に対して住棟は傾いで配置されているものの、各住棟端部に塔が立ち上げられ、広場の入隅が作られると同時に、道路に対するゲートが形成されていた。それぞれ、実施設計に携わった建築家が異なり、用いられている様式も異なっているが、バタフライ型住棟によって、入隅をもちかつ道路のヴィスタが閉ざされた六角形の交差点広場が囲われている点では共通している。その意味ではアンウィンのモデルが、ハムステッド・ガーデン・サバークにおいて多様な形で実現され、変化に富んだノード (node) のシーケンスが作り出されていると言うことができる。

しかしながら、実現された3例では、住棟の壁面が大きい六角形をなして交差点広場を囲っているため、斜角は端部の住戸平面にしか現れず、そこに楔形の部屋がとられていたに過ぎない。逆に、ハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点のベイリー・スコット案では、住戸平面に斜角が生かされているものの、斜めに突き出されたウィングの間隔が狭く、交差点広場を大きく囲うことができなかった。それは、本来住宅のスケールで考えられていた平面が都市のスケールに応用された際生ずる齟齬であろう。また住棟における立面と平面の分節の食い違いは、所与のストリート・ピクチュアから住戸平面をおこしていく設計過程に由来するものであろう。更に現況では道路に沿って巡らされた生垣が、住棟の壁面による交差点広場の包囲を相殺している。アンウィンは「イギリス人は庭園における何らかのプライバシーを欲している。とりわけその囲いは、人に安らぎを与え、かつ庭園の字義から言ってもそれに不可欠のものである」³⁷⁾と考え、各住戸の庭園を生垣で囲うことを推奨した。その結果、生垣による私的な小さい庭園の包囲が、住棟の壁面による公的な大きい広場の包囲の効果を減ずることとなったのである。以上の諸点に、アンウィンの道路交差点モデルの問題が集約されていると考えられる。

注

- 1) 本稿は、「イギリスの田園郊外とその住宅に関する研究 1. ハムステッド・ガーデン・サバークにおけるバタフライ型住棟について」、日本建築学会大会学術講演梗概集、1986年、pp. 859-860. を発展させたものである。筆者による田園郊外に関する研究は、『イギリスの郊外住宅』、住まいの図書館出版局、1987年 及び『田園都市の計画とその住居形式に関する研究(1)』、住宅総合研究財団、1993年(共著)がある。
- 2) ここでは、「田園郊外」を「郊外」という広い範疇の一例としてとらえ、「田園都市」の亜流としてとらえるのではない。それゆえ、『田園郊外』を『田園都市』の方針に則して配置された郊外として説明するのは誤りである」とするF. J. オズボーンの指摘 (Preface to E.

Howard, *Garden Cities of To-Morrow*, Cambridge, Mass., 1965, p. 26.) に抵触するものではない。

- 3) Nikolaus Pevsner, *The Buildings of England: Middlesex*, Penguin Books, 1951, p. 59.
- 4) Raymond Unwin, *Town Planning in Practice*, 1909, second edition, New York, 1934, p. 329.
- 5) *Ibid.*, p. 363.
- 6) *Ibid.*, p. 364.
- 7) *Ibid.*, p. 350.
- 8) *Ibid.*, p. 246.
- 9) *Ibid.*, p. 241.
- 10) *Ibid.*, p. 245.
- 11) *Ibid.*, p. xvii.
- 12) *Ibid.*, p. 225.
- 13) *Ibid.*, p. 173.
- 14) *Ibid.*, p. 246.
- 15) 『都市計画の実践』の中には、パリのヴァンドーム広場、コペンハーゲンのアマリエンボルク広場、エディンバラのモーレイ・プレイスと共に、カールスルーエのローデン広場の写真と地図が掲載されている。その写真から、建物に付けられた神殿正面が道路の軸線に正対し、それが道路上のヴィスタの終結となっていることが見て取れるし、その地図から、アンウィンが推奨する変形十字路のパターンが読み取れる。
- 16) バーネット夫人は、地方紙「ハム・アンド・ハイ」に「労働者階級のための田園郊外」を投稿し、そこで「店舗やいくつかの大きな住宅を含む労働者階級のための住宅地」建設の提案を行った。Henrietta Barnett, 'Garden Suburb for the Working Class', *Ham and High*, November 28, 1903.
- 17) H. Barnett, 'A Garden Suburb at Hampstead', *Contemporary Review*, February, 1905.
- 18) ハワードは田園都市の開発に当たり、土地買収資金はA債券によって、当該土地における上屋の建設はB債券によって調達すべきであると考え (E. Howard, *op. cit.*, pp. 70-72.)、それに基づきレッチワースでは「第一田園都市株式会社」が債券を発行し、それによる資金で土地を買収した後、「田園都市借家人株式会社」が別途債券による資金で上屋を建設した。この方式がハムステッド・ガーデン・サバークでも踏襲されている。
- 19) アンウィンは、バーネット夫人の推奨でハムステッド・ガーデン・サバークに関わるようになった。バーネット夫人は1904年 9月にアンウィンの著作を読み、「この人こそ美しい緑あふれた私の黄金計画を為す人だ」と口にしたと言う。H. Barnett, *The Story of the Growth of Hampstead Garden Suburb*, The Hampstead Garden Suburb Trust Ltd., 1928, p. 7.
- 20) ハムステッド・ガーデン・サバーク・トラスト株式会社の初代社長に就任したのが、ラッチェンスの知己であるアルフレッド・リッテルトンであった。ラッチェンスはリッテルトンの別荘グレイ・ウォールズ (Grey Walls, East Lothian, 1900) を設計しており、恐らくその関係でラッチェンスが顧問建築家に選ばれたのであろう。
- 21) アンウィンによる最初のマスタープランが1905年 2月22日付けをもち、バーネット夫人による「コンテンポラリー

ー・レビュー」誌の論文が同年 2月号掲載であることから、両者は相補的であると考えることができる。事実、バーネット夫人はこのマスタープランに多くの書き込みを加えている。

- 22) エデンは、丘上に宗教・教育施設を設けるというバーネット夫人の構想がグラムやリンカーンに由来すると考えている。W.A. Eden, 'Hampstead Garden Suburb 1907-1957', *RIBA Journal*, LXIV, 1957, pp. 491-492.
- 23) この三角形の緑地（現在のウィリフィールド・グリーン）について、アンウィンがアストバリーのヴィレッジ・グリーンを参照したものであることを示唆している。R. Unwin, *Housing and Town Planning Lectures at Columbia University*, 1936-37, reprinted in W.L. Creese, *The Legacy of Raymond Unwin*, Cambridge, Mass., 1967, p. 184.
- 24) この道路は、中央広場東側の扇状斜面に沿って設けられているが、それに関してアンウィン自身はコンスタンチノーブルの影響を認めている。R. Unwin, *Town Planning in Practice*, p. 221.
- 25) 1911年に、旧郊外東側に隣接する敷地112 エーカーをハムステッド・ガーデン・サバーク・トラスト株式会社が、更にその東側に広がる敷地300 エーカーを共同借家人株式会社（借地することになり、アンウィンはこの新郊外に対するマスタープランを1911年 6月にトラスト株式会社の取締役会に提示、1912年 8月にトラスト株式会社の発行する雑誌「ザ・レコード」に発表した。1916年 3月のトラスト株式会社の取締役会で、同社取締役兼共同借家人株式会社社長であるヘンリー・ヴィヴィアンは、トラスト株式会社は共同借家人株式会社の300 エーカーに建てられる建物のデザインや建設を管理する権利はないと主張し、1919年にはトラスト株式会社の取締役を辞した。同年、トラスト株式会社のもつ112 エーカーの借地権が共同借家人株式会社へと移譲され、新郊外412 エーカー全てが共同借家人株式会社の借地となり、1922年には共同借家人株式会社が独自で新郊外のレイアウトを決定したのである。
- 26) Jill Franklin, 'Edwardian Butterfly Houses', *Architectural Review*, June, 1975, pp. 220-225. and *The Gentleman's Country House and Its Plan 1835-1914*, London, 1981, pp. 232-237. 鈴木博之、「蝶の館」、『ジェントルマンの文化』、日本経済新聞社、1982年、pp. 129-146. 参照
- 27) ウッドはパーカー&アンウィンが属していた「北部アートワーカーズギルド」の中心メンバーであったが、その彼もバタフライ型住宅（House at Dore, nr. Sheffield, c. 1904）を計画しており、テイラーはそれがパーカー&アンウィンに影響を与えたと言う。Nicholas Taylor, 'The Houses of Parker and Unwin', *Barry Parker & Raymond Unwin Architects*, London, 1980, pp. 14-15.
- 28) パーカー&アンウィンは、ソーンズウェイト牧師館（Thorntonwaite Vicarage, Cumberland, 1903）で、バタフライ型平面を試みている。F. Jackson, *Sir Raymond Unwin*, London, 1985, pp. 36-37.
- 29) プライア設計のバタフライ型住宅、ザ・バーン（The Barn, Devon, 1896-97）についてのグラディジはこう評している。Roderick Gradidge, *Dream Houses: The Edwardian Ideal*, London, 1980, p. 156.
- 30) J. Franklin, *The Gentleman's Country House and Its Plan 1835-1914*, p. 232.
- 31) R. Unwin, *Town Planning in Practice*, p. 338.
- 32) フランクリンは、このような平面を「北廊下型平面」と呼び、エドワード朝の新考案として位置付けている。J. Franklin, *op. cit.*, pp. 227-232.
- 33) コーンウルフは、ベイリー・スコットのオープン・プランをライトの草原住宅からデ・スティールへ至る近代建築の流れに位置付けようとしている。J. D. Kornwolf, *H. H. Baillie Scott and the Arts and Crafts Movement*, Baltimore, 1972, pp. 193-196.
- 34) フランクリンは、ベイリー・スコットのバタフライ型住宅における六角形ホールは、明らかにプライアのザ・バーンから影響を受けていると述べている。J. Franklin, 'Edwardian Butterfly Houses', p. 221.
- 35) ラッチェンス設計のベリーダウン（Berrydown, Hampshire, 1897-98）やホームウッド（Homewood, Hertfordshire, 1901）、ヴォイジーのセミデタッチドハウス計画案（Semidetached House, 1903）に1階まで低く垂れ下がった二連ゲートルのモチーフが見られる。
- 36) ハムステッド・ガーデン・サバークにおいてパーカー&アンウィンが設計した公共建築、例えばクラブ・ハウス（1909年竣工）やロンドンへ至る幹線道路に面した「ゲート」を構成するアーケード・ハウス（1909年設計）とテンプル・フォーチュン・ハウス（1912年設計）には、ローテンブルグのマルクストゥルムの影響を受けたと思われる塔が建てられている。但し、コックスは前者の塔がラッチェンス設計のザ・プレザンス（The Pleasance, Norfolk, 1897-98）の時計塔に相似していることを指摘している。Shankland Cox & Associates, *Hampstead Garden Suburb: Plan for Conservation*, 1971, p. 132. ここにおける塔も、パーカー&アンウィンの塔デザインの系譜に位置付けることができよう。
- 37) R. Unwin, *Town Planning in Practice*, p. 356.

図版出典

- 1, 3, 5 R. Unwin, *Town Planning in Practice*, New York 1934.
- 2, 4 Brigid Grafton Green, *Hampstead Garden Suburb 1907-1977*, London, 1977.
- 6, 7, 8, 9 J. D. Kornwolf, *H. H. Baillie Scott and the Arts and Crafts Movement*, Baltimore, 1972.
- 10, 11, 12, 13, 15, 16, 17, 18, 20, 21, 22, 23 筆者作図、Hampstead Garden Suburb Archive 所蔵の図面に基づく
- 14, 19, 24 筆者撮影

（1993年12月10日原稿受理、1994年5月27日採用決定）